

黑白の虹

高木彬光



角川文庫 3410

こくびやく にじ
黒白の虹

たかぎ あきみつ
高木彬光



角川文庫 3410

昭和五十年三月一日 初版発行
昭和五十九年八月三十日 十五版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二—十三—三

電話 編集部(〇三)二三三八—八四五—

営業部(〇三)二三三八—八五二—

〒一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——旭印刷 製本所——大谷製本

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

黒白の虹

高木彬光



角川文庫 3410

第一部 黄金の街の亡霊

満鉄を蘇生させよ

昭和二十八年一月――

兜町は、溶鉱炉のように白熱化していた。黄金の街、日本のウォール街といわれるこの町へ、眼の色を変えて集まってくる人々は、自分から好んで増埒の中へ飛びこむような運命をたどっていたのだが、このときは誰も、一か月後に迫った大恐慌を予想していなかったのである。

日本の戦後経済の復興のためには神風だといわれた朝鮮戦争は、いくらか膠着した戦線をはさんで、まだまだ熾烈な戦闘状態をつづけていた。無責任な、いわゆる識者たちの中には、百年戦争だと断言する者さえあったくらいだった。そこまではいかなくても、十年戦争だと予言する人はざらだった。

満州事変から始まる泥沼のような日中事変の経験が、全日本人の頭の中に、どす黒い澱のような思い出を残していることを考えれば、それもとうぜんのことかもしれない。とにかく、この戦争がつづくかぎり、日本は前線基地として、永遠の発展を約束されているように見えたのである。

その幻影は、何百倍かに拡大されて、株価の動きに反映した。ありとあらゆる株が、気違いのように値をとばした。東芝、日立というような日本の代表的な大会社の株が、つい数年前まで、額面以下で低迷していたことを思い出す人間は、兜町にさえ少なかつた。

証券会社の社員たちは、

「なにも有望株なんか、骨を折って捜すことはないさ。眼をつぶって、新聞の証券欄を鉛筆の先でおさえ、その株をすすめておけばそれでいいんだよ」
などと放言するようになっていた。

白熱的な全面上げ相場の場面では、たしかにそれでも儲かるのである。株というものは、買えばさえずれば儲かるのだ——という考えを通りこして、このさい、株を買わないやつはばかだ——という考えが、全日本の通念となりかけていた。

終戦後の食糧不足の時代に、都会から農村へ流れこみ、預金封鎖や新円切替えの苦い経験から、黙ってたんす筆筒の中に眠っていた現金も、先を争って、リュックサックに詰めこまれ、この街へ逆流してくるようだった。

朝の九時ごろには、どこの証券会社の店頭にも、お客はわんざとつめかけてくる。まるで映画でも見るように、手に汗を握って一喜一憂しながら店頭の椅子に腰をおろして黒板の上に縦横に書きこまれていく数字の動きを見つめている……。

無心な数字の一円二円の動きも、彼らの頭には何千倍、何万倍かにふくれあがり、何千円、何万円の儲けとなって映ってくるのだ。そういう人々の中に、この街には場違いのように見えるリ

ユックを持った農民らしい男が、何割かまじっているのは、噂も事実だということをはっきり物語る証拠だった。

まだ、事務処理の機械化も進んでいなかっただけに、どこの証券会社でも、毎日残業の連続だった。ついに、近くの宿屋と長期契約を結んで、社員たちを連続的に罐詰にする会社さえあらわれた。その人々が、翌日の午前二時、三時まで仕事をつづけて、やっとその日の取引きの整理ができるという状態は、たしかに異常そのものだった。

何かがどこかで狂っていた。しかし、その狂乱の渦中にはいってしまった人間は、それに気がつかないのもとうぜんのことかもしれない。

「いったい兜町はどうなるんだね？」

自分でも、たえず気になってたまらないこの質問を、友人の東洋新聞の記者、津上敏夫から逆にあびせかけられて、西沢貞彦は苦笑いした。

二人とも、年は三十二歳になる。出身校は同じ稲大、戦争では華北とラバウルに派遣されたが、運よくたいした激戦も経験せずに帰還してきたのだった。復員の時期はちょっと違っていたが、津上敏夫は東洋新聞社に入社し、貞彦は叔父の木下鋭造が専務をしている関係で、兜町の東福証券にはいったのである。

今日は、突然、津上敏夫がたずねてきて、「狂乱の黄金街」というような題で連続読物を書くという企画が出た、それで取材に協力してもらえないかと言いだしたのだった。

西沢貞彦も疲れていた。このところ、証券会社では昼もゆっくり休んではおられない。十二時を過ぎると、会社の昼休みを利用して投資相談にやってくるサラリーマンのお客がわんさと渦をまくからだ。

それで、一日ぐらいいは息ぬきをしようと、同僚にかわりを頼み、早めに店を抜けだして、日本橋のレストランまで昼食にやってきたのだが、テーブルにすわったとたん、相手の投げだした言葉が、いちばん急所をついたこんな質問だったのである。

「さあ、どういふことになるのかね。危険状態——それも最悪の事態がごく接近しているんじゃないかと思えるがね。ただ、その時期はわからない」

「どうしてそんなことが言える？」

津上敏夫の眼は、度の強い近眼鏡のかけできらりと光った。学生時代、ニヒリストだと言われたころの風貌は、社会に出てからも変わっていない。やせて肉のない頬のあたりに、ちらりと皮肉な影が浮かんだ。

「君なんかが、この街へやってくるようじゃ、いよいよもって、相場は末期症状だね」

「なんだって？」

「いや、僕が皮肉を言うんじゃない。株式相場というものには、もともと、そんな皮肉なところがあるんだよ。『天まで伸びる樹はない』という諺がシマにはあるが、どんな熱狂相場だって、いつかは天井を打つときがくる。君たちのような、社会部の記者がやってきて、そんな特集をやるうと言うんじゃない、そろそろ警戒警報ものだね。この反対に、社会面に株のしくじりで自殺した

という記事がいくつも出たり、どこかの証券会社がつぶれそうだというような噂が出たら陰の極、眼をつぶって買いにはいるのがほんとうだろうな」

「なるほどな。『人の行く裏に道あり花の山』とかいう言葉のとおりだな」

「よく知っているな。相場の格言を」

「社の経済部の記者に聞いてきたんだ」

もちろん、こういう特集記事を作るときには、社会部だけではなく、経済部から政治部まで、えりぬきのスタッフが何人か集まって衆知を絞るはずだ。こういう玄人くわんとっぽいせりふがとびだしでも、なんのふしぎもないことだった。

「しかし、証券会社の連中は、こう言っているそうじゃないか。

『かりに何かの拍子で、株が買った値段から値下がりしたとしても、日本経済の復興はまだ序の口だ。じっとその株を抱いて辛抱しんぼうしていれば、必ずむくいられるときがくる』

ここだけの話として聞くが、君はそういう考えをどう思うんだね」

「証券マンなら、誰でもいちおうそう言うさ。たしかに長い眼で見たら、それは真理に違いないけれども、ただその買い方が問題だろうな」

「というと？」

「無理のない余分な金で買っているかどうかということさ。最悪の場合、それをないものとあきらめて、たんす筒の中へしまいこみ、何年でもほうっておけるだけの力があれば、それはたしかに正しいだろう。しかし、いまのお客のようすを見ていると、血迷っているという感じがくる。投

資じゃなくって投機になってしまっている。それも小豆や人絹などの商品相場のように、最初から投機に徹する気持ちならいいけれども、いまのお客はその見さかいてもついちゃいないんだよ。自分の金ではなく、借金をして株を買っているようでは、相場が崩れたときにはふみこたえられないよ」

「そんなお客が多いのか？」

「つい、この間も会計のやつが言っていたんだが、田舎のお客の持ってきた金は数えているとわかるそうだ。筆筒の中に長くしまっているものだから、札がしめっぽく、かびくさくなっているらしいんだね。そういう金で株を買うなら、最悪の場合でも、筆筒預金が筆筒株券に変わったと思えばあきらめがつくだろう。しかし、うちの店に来るお客さんの中にも、退職金を全部はたいて、毎日通いつめている元教師がいる。旦那さんには内緒で店を抵当に入れ、その金で株を買っている美容院のマダムがいる。万一の場合、そんな人がどんなことになるかと思うと、こっちは溜息が出るけれども、証券会社で月給をもらっている以上、まさかおよしなさいとも言えないじゃないか。君の社あたりで、それを警告してくれればいいんだが、しかし実際問題として、今日買えば明日は儲かるんだし、暴落相場の経験がなかったら、ああいう人たちは、そんな記事など気にもとめまいね」

「なるほど。人間は誰しも欲の前には眼が見えなくなるからな。今日買った株が明日上がって儲かるなら、明後日、いや一月先のことなど考えはしないだろう。シンガポールで戦争をやめるという議論は受けいれられまい」

「たしかにそれはいいたとえだな。僕はいま、こわくてたまらないんだよ。たとえば十万円の貯金をおろして、十万円相当の株を買うなら、半値になったとしても、五万円の損ですむだろう。まだあきらめもつくだろうが、十万円の元金に十万円の借金をして、二十万円相当の株を買って、いたとしたら、どうなる。これが半値になったなら、元金全部がふっとぶんだ。いや、まだそのくらいならいいかもしれないが……」

「借金してまで株を買うような、そんなお客が多いのか？」

「多いとも。シマ——兜町には、信用取引きという制度がある。三割程度の証拠金で株を売り買いできるしくみだ。いまの言い方をすると、十万の現金を保証金として預ければ、三十万相当の株が買えるんだ。そのかわりに、担保として十五万ぐらいの株券を預けてもいい。これだったら、株が三割ぐらい値下がりしただけで、元金はパーになってしまふんだよ。いや、もしも全面下げ相場になったとしたら、担保においてある株券のほうも値下がりするだろうし、もっとひどいことになるかもしれないな」

「なるほどね」

津上敏夫はうなずいた。経済部の記者に聞いてきて、予備知識があったせいだろうが、べつにその点について深くつっこんだ質問もしなかった。

それからしばらく話がつづいた。たしかに、黄金に憑かれた人々の狂態には、社会部の記者を興奮させるような要素も濃いはずなのだが、津上敏夫はメモに鉛筆を走らせながら、話も上の空で、何かを考えているようだった。食事も終わり店へ帰らなければいけない時間も近づいてきた。

貞彦がそう言いだすと、津上敏夫は眼を据えて、何か思いつめたようにたずねてきた。

「それでは最後に一つだけ、友だちがいかに教えてもらえないかね？」

「なんだ。君と僕とのあいだで、いまさら……」

「われわれにでも買える値段で、絶対確実、猛烈に値上がりするような大穴株はないだろうか？」

西沢貞彦は、そのとき戦慄せんりつに近いそら恐ろしさを感じたくらいだった。

貞彦がほかへ取材にまわるといふ津上敏夫と別れて店へ帰ってくると、受付の女の子が声をかけた。

「西沢さん、社長がお呼びです」

「何かな？」

貞彦は、ひとりごとを言いながら首をひねった。

どんな会社にも、内部には閥わくのようなものがあるが、この東福証券にも、やはり社長派と専務派が存在していた。

もちろん、それは内紛とか暗闘とかいうほど根強いものではなかったが、むかしながらの相場師根性を強く持っている社長と、それからの脱皮を主張する専務とは、なんとなくうまがあわなかった。そして、西沢貞彦はその血のつながりだけからいっても、専務派の最右翼と社内全体から思われているが、それも仕方がないことだった。

貞彦は、店先いっばいにつめかけているお客をかきわけるようにして、奥へはいり、二階への階段を上がった。

社長室へはいると、井上文治社長は何かいらいらしているように、部屋の中を歩きまわっていた。

年は六十三になる。でっぷり太った赤ら顔だが、その童顔にもこのごろはなんとなく、生気がうすれてきたようだった。この大相場で、手持ち株はたいへんな値上がりを見せている。笑いとまらないようなにこにこ顔でもないはずなのに、このところ、逆の焦燥感を見せているのは、相場師的な本能が虫の知らせのように、なにか前途の暗さをささやいているせいかもしれぬ。

「西沢君か、まあ、かけたまえ」

デスクにもどって、井上文治は眼の前の椅子を指さした。

「失礼します」

貞彦は、ゆっくり椅子に腰をおろした。顔色と声の調子だけから判断しても、この社長が、何か重大な用件で、彼を呼びだしたことはわかった。

「木下君の容体はどんなふうだね？」

葉巻を一本貞彦にすすめ、自分でも火をつけながらたずねてきた。

専務の木下鋭造は、昨年からの過労と、交際の酒がたたったのか、正月早々、胃潰瘍をおこし、激しい吐血のあとで入院したのだ。むろん、命にかかわるようなことはないとしても、しばらくは絶対安静で、会社へ出てくるわけにはいかなかった。

「はい、昨日も電話をかけてみましたが、その後の経過は順調なようです。この重大な時期に倒れて、陣頭に立てないのが、残念でたまらないと、家族たちには、たえずもらしているようですが」

「まあ、僕も片手をなくしたような思いだが、病気ではどうにも仕方がない……相場は永久にあるものだ。三碧辰年——三十六年めに一度の大相場で、残念だろうが、会社のことは気にしないで十分静養するように、君からもよく言っておいてくれたまえ」

「はい……」

そのあとに、ちょっと間をおいて、井土社長は葉巻を灰皿に捨てながら言いだした。

「ところで、君に一つ重大な頼みがあるが、たいへんな無理難題と思わずに聞いてもらいたいのだ」

「はい。それはいったい何でしょう？」

「実は、どういう非常手段をとっても、このさい、満鉄の株に値をつけてもらいたいのだよ」

貞彦も思わずあつと声をあげた。そのあとの一分か二分の間に、頭の中では、いろいろの考えが、縦横無尽にとびまわった。

満鉄——といえば、言うまでもなく、南満州鉄道株式会社のことである。いや、そのような名前を持ちだすまでもなく、彼ぐらいの年配の人間には、忘れきれない二字なのだ。

本業は鉄道会社なのだが、日本の大陸政策の根幹として、その勢力はいたるところにのびてい

た。

経済、政治はもちろんのこと、軍事面でさえ、満州では、満鉄の協力がないかぎり何もできなかったといつてよい。満鉄総裁といえば、文官の中から、大臣級の大物があてられることになっていたが、関東軍司令官が駐満大使を兼ねている以上、満鉄総裁はこれとともに、満州国を支配する両翼の一つとさえいえるのだった。

その資本金も貞彦の記憶では、十四億円、そのうち民間の払込みは、二億円だった。

かりに、戦前と、戦後の物価指数を四百倍として計算すれば、これは五千六百億円に相当する。もちろん、会社のほんとうの資産はこの数倍にのぼっているわけだし、これに匹敵するだけの大会社は、現在の日本には一つも存在しない。

しかし、それもいまとなつては、むなしい過去の思い出にすぎない。終戦のために、日本の海外資産は、すべて壊滅かいめつして無に帰したのだ。米国あたりに凍結されている分だけは、まだしも一縷いもうの希望はあるが、アジア大陸のものは完全に絶望だった。

実際問題として、これほど株式市場が熱狂し、得体のしれない泡沫会社の株までが、すごい高値に買いあげられるようになっても、満鉄や、北支開発、中支振興など、一連の国策会社の株には、とうぜんのことながら値もつかなかった。

取引所再開以前には、一度だけ、二円という値がついたということも聞いているが、それも数年前のことで、いまは誰からも忘れられかけていた。

井上社長のこの注文は、貞彦にとつても、すでに白骨化した死体をよみがえらせろというよう

な不可能事と思われたのである。

「社長……どうして、そんなことを考えたのですか？」

逆に詰問するような調子で彼はたずねた。

「実はさっき、僕の旧友が訪ねてきてね。むかしはたいへん羽ぶりをきかした男だが、いまはこの戦争のおかげで没落してしまつて見る影もない……その男がいろいろ話をしていゝうちに、満鉄の株ならだいたいぶ持っているが、このとおりの白熱相場だから、なんとか値がつくかもしれない。買ってくれないかと言いだしたのだ。僕もすっかり気の毒になつて、最悪の場合には、金を溝へ捨てるつもりで買ひとつたのだよ」

「いったい、何株ぐらいお買ひになつたのですか？」

「そこにあるポストン一杯分だ」

井上社長は、戸棚の前の小テーブルにのせてあるポストンを指さして言った。

貞彦も、この言葉には度胆をぬかれた。いかに相場が荒つぽく、氣違ひのように動いていゝといつても、一山いくらと言わんばかりのこんな乱暴な取引きは、いままで見たことも聞いたこともなかつたのである。

しかし、この間も、やはり旧国策会社の話があつて、こんな株だけは、いまさらどうにもしようがあるまい、涙をかむには厚すぎるし、襖の修理にでも使うのがいいところだ——というような嘲笑で終わったくらいなのだ。株券を有価証券ではなく、ただの紙片と考えるなら、ポストン一杯でいくらという値段のほうが、かえつて筋も通つていゝはずだ……。

「事情はお察ししますが、それだけとはとても無理ですね。僕だけではなく、この店の誰も、いや全兜町で、そんな奇跡を実現できる人間は、一人もいないでしょう」

「いや、こういう白熱相場のときには、往々その奇跡がおこるものなのだよ」
井上社長の両眼は、熱っぽい光をおびた。

「満鉄はたしかに死んでしまった。大日本帝国といっしょに墓に埋められたのだ……しかし、まだその幻影は生きています。過去の華やかな思い出は、まだ全日本人の心の中に残っている。これをよみがえらせるのだ」

「できません……」

「もし、ほんとうに蘇生させられないのなら、幽霊でもよい。満鉄の幽霊をこのシマに出没させたまえ。そうすれば、とうぜんその株にも値がつくのだ」

「社長は、転んでも、ただ起きない性格ですからね」

それが精いっぱい皮肉だったが、井上社長はそれをたたきのめすように言いきった。

「あたりまえだ。兜町で勝負をするからには、転んでも、ただ起きられるものじゃない。ここへ来るお客は、みんな催眠術にかけられやすい人種なんだ。彼らに幻影を見せてやれ。それが空中の虹だったとしても、地上の幽霊だったとしても、彼らは必ずとびついてくる。それが手にとれるかどうかは、われわれの知ったことではないんだよ」